第4節　高等学校における授業改善のポイント

青年中期の発達特性

高校生は青年中期に当たる。青年期は子どもから大人へと移行する人生で重要な時期であり、身体的には第二次性徴によって急激な変化を遂げる。しかし、精神的な変化がそれについていけず、敏感で不安定な時期である。身体的、精神的、社会的に「疾風怒濤」(Ｃ．Ｓ．ホール）の時代であり、「第２の誕生」（Ｅ．シュプランガー）と言っても過言ではない。また、「自分に関する自己定義がはっきりし、自分が真に関与できる社会的価値を選択できる」自分と「自分について分からず、自分の社会的価値も分からず、将来の見通しも立たない」自分とが混在し、幼児期から形成してきた自分を再検討する時期である。

青年期の問題を考えるとき、最も参考になるのはＥ．Ｈ．エリクソンの「自我同一性」の概念である。青年期の発達の課題は今まで達成してきた課題を点検し、再統合することである。それに失敗した場合、「自我同一性の拡散」という「危機」に直面する。

エリクソンのいう「危機」とは「分岐点」「峠」を意味しており、しかもそれは人間の生涯を通して次々と展開していく危機を意味している。したがって否定的なものとしてとらえるのではなく、発達のための決定的な契機としてむしろなくてはならないものであり、それまでの心的体制が、次の新しい心的体制に向かう時に再体制化されていく時期としてとらえるべきである。それ故に、この危機は私たちが日常生活でいう人生の「節」に極めて近い言葉である。この「節」を経て、

・他者への依存から独立して、自信と責任性が強くなり、自立的になる。
・情報処理能力や問題解決能力、計算能力が養われる。
・社会的・精神的生活でセルフコントロールが本格的にできるようになる。

と言われている。

自己コントロール力や自己肯定感の獲得はまさに自我同一性、つまりアイデンティティの確立にとって欠くことのできないものである。しかし、前述の高校生へのアンケートでは「『粘り強さ』にかかわる自己コントロール力」が備わっている生徒は少なく、また「自己肯定感」を実感している生徒も決して多いとは言えないという結果であった。したがって、青年期の特性を踏まえながら、さらなる自己コントロール力と自己肯定感をはぐくむ授業を展開し、授業改善を図ることが重要である。

今日的課題とのかかわりから

教育の今日的課題として、基礎・基本の徹底による学力の充実・向上、個性を生かす教育の推進、社会の変化に対応できる力の育成があげられる。

明確な目標をもっている生徒が少ない現代、生徒に目標をもたせることがこれらの課題解決への最善の方法である。個に応じた教育を行い、その中で生徒自身が自分に応じた目標をもつようになれば、自ずとその生徒の個性は生かされることになる。

授業においても生徒それぞれが目標をもち、基礎・基本を身に付けていく過程で「自己コントロール力が育ち、自己肯定感が実感できる学習」が展開されるならば、やればできるという自信や自己指導能力が生まれる。同時に、それが学力の充実・向上につながり、ひいてはそのことが自ら学び自ら考える力、すなわち生きる力の基盤となる。これらの力は自分自身で体験する直接経験を通してはぐくんでいく方がより効果的であるから、問題解決的な学習を取り入れた参加型の学習や体験的な学習を行うことを重視すべきである。

また、表現力はソーシャルスキルの基盤とも言うべき能力であり、各教科を通じてこれを育成するという意識をもつことが肝要である。

社会の変化に対応できる力の育成を考えた場合、学びへの意欲と学び方が一層重要になる。

以上の観点から今回は国語科（国語Ｉ）と理科（生物ＩＢ）の授業実践の中に、

- 自ら学び、自ら考える主体的な授業
- 個に応じた指導を取り入れた授業
- 生徒と教師、生徒と生徒の間で共感的な人間関係が構築できる授業
- 適切な自己抑制、自己発揮、自己決定の場がある授業
- 適度な緊張感と手応えのある課題を設定し、意欲を高める授業
- 表現力の育成を重視した授業
- 参加型・体験型の授業

を意識的かつ計画的に取り入れ、授業改善の在り方を探ろうとした。

国語Ｉの授業実践においては、現代詩を学習する過程において、「生きる」ということを生徒自身が主体的に考えることができる場を設けることとし、学習過程にグループ学習を取り入れた。青年中期の入り口に当たる高校１年生に自己の生き方に迫る内容の詩を紹介することにより、人は他者とのかかわりの中で生きている、生かされているということに気付かせ、それらの詩を主体的に読んで感想を書くことにより、自己肯定感が実感できると考えられる。グループ学習の形態を取り入れたのは、少人数の方が学級全体の場で話し合うより、自分の抱いた感想や意見を素直に表現しやすく、活発な意見交流を図ることができるであろうと考えたためである。自己コントロール力については、自分の感想や意見を述べる活動、他の人の感想や意見を聞くという活動、さらに自分で詩を創作する活動を通して、その力の育成につなげることができると考えられる。

現代詩の学習を通して、自己の生を振り返り、今後の在り方生き方に思いを至らせる。他者の存在を意識することにより自己を見直す機会とする。また、活発に詩の感想や意見を述べ合うことにより、国語科の教科目標にある伝え合う力を育成することにつなげたいと考えた。

生物ＩＢの授業では、生徒たちが主体的に「実験の企画→実験の実施→実験成果の発表」を行う授業展開とした。しかし、時間や実験器具の制約、単元目標の達成等の諸条件があるので、要所、要所では効率よく指導を行った。学習形態はグループ学習とし、個に応じた指導を意識して、グループの編成は同じテーマの実験に興味・関心のある生徒同士とした。グループ学習なので、協力体制を整えなければ、また共感的人間関係が伴わなければスムーズに進まない。したがって必然的に、自制心、自律心など様々な種類の自己コントロール力が育成されることが期待される。また、自分たちが企画した実験方法で、実際に自分たちで実験をすることにより、充実感、満足感、成就感を味わい自己肯定感が実感できる。さらに実験の成果を発表することで表現力が育成されることはもちろんのこと、付加価値として発表に至るまでにアサーション・トレーニングがなされ、適度な緊張感の中で自己存在感を実感しながら、主体的な学習姿勢や論理的思考力が身に付くと考えられる。

効果的な学習方法の条件は、個に応じた指導であり、きめ細かいステップで構成された教材があり、個に応じた教材の選択が可能で、学習を支援する教師がいることである。

今回の理科(生物ＩＢ)の授業改善は、これらの条件を満たしているものと考える。

1　国語科

高等学校国語科（国語Ⅰ）における方策

「現代詩」
－自己を見つめ、「生」について考える－　　（普通科第Ⅰ類第１学年）

(1)高等学校国語科の目標や内容とのかかわりと研究の視点

ア　目標とのかかわり

（高等学校国語の目標）

> 国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

高等学校国語の目標を達成するには、次に示すように自己コントロール力や自己肯定感の支えが重要な要素となると考える。

・自分の思いや考えを「適切に表現」するためには、自分の思いや考えを肯定的にとらえ、確かな表現方法を身に付けるなど表現への自信を高めることが必要である。
・他者の思いや考えを「的確に理解する」ためには、他者の思いや考えを自分で脚色することなく正確に聞き取ったり、文章を筋道立てて読んだりして理解する自己コントロール力を身に付けることが必要である。
・「伝え合う力を高める」ためには、自己肯定感を実感して自他を尊重し、相手、場や状況に応じて臨機応変に言語活動を行う力が必要である。

今回の授業実践においては、目標に示されている言語能力を確かなものにするために、現代詩の学習を通して、自己コントロール力をはぐくみ自己肯定感を実感することができるように研究することにした。

現代詩の読解を通して、豊かな感性をはぐくみ、自分ならこう感じる、自分ならこう表現したい、という思いを意欲的にもたせるようにしたいと考えた。自分の思いを肯定的にとらえ、積極的に他者に伝える。他者の思いにじっくり耳を傾け、自分の思いと共通する点や相違する点を確かめながら、思索を深める。そうした学習の過程において、自己コントロール力をはぐくんでいくと同時に自己肯定感を一層強いものにすることができるように指導計画を考えた。

イ　本単元における領域の内容とのかかわり

本単元で取り扱う、「国語Ⅰ」の２領域１事項のうち、「Ａ　表現」「Ｂ　理解」の内容と自己肯定感・自己コントロール力とのかかわりを次のようにとらえた。

> **「Ａ　表現」の内容とのかかわり**
> **自己コントロール力**…目的や場面に応じて効果的に話すことによって、論理的な思考を働かせ自分の思いや考えを深め、伝え合う力を育成する。
> **自己肯定感**…話すことを想定して、自分の思いや考えをまとめ、主題や論旨が明確になるように構成を工夫して話す。他者に自分の思いが正確

に伝わるよう筋道を立てて話すことによって、伝え合う喜びを臨場感をもって実感する。

「B　理解」の内容とのかかわり

自己コントロール力…話の構成や展開に注意して、話し手の考えの進め方や強調点をとらえ、相互に伝え合う言語活動に効果的に活用する能力を育成する。

自己肯定感　…現代詩を表現に即して読み味わうことを通して、ものの感じ方、見方、考え方を広くし、人としての在り方についての考えを深め、自己のよりよい在り方生き方について考える。

（アンダーラインが「A　表現」「B　理解」の内容に関連する部分）

平成15年度から、新学習指導要領が学年進行により実施される。今回の授業実践の研究においては、新学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえながら現行の学習指導要領のもとで、生徒の言語活動を活発にして言語能力を伸ばす学習指導計画を立てた。また自己の在り方生き方についてもじっくりと考える時間を確保し、その中で自己肯定感を実感することと自己コントロール力をはぐくんでいけるように考えた。

ウ　研究の視点

高等学校の国語科の授業は、ややもすると教師対生徒というような授業となり、生徒は教師の話を聞くのが中心となり受け身的な姿勢となりがちである。授業の中で教師からの発問や投げかけに応じる形で生徒は考えるが、考えた結果を述べる機会はどちらかといえば少ない。生徒の多くは、ノートをとる、プリントに書き込むということ以外の活動はあまりなく、どうしても受け身的にならざるを得ない。このような実態はおよそ指導者側の姿勢に課題があるのではないかと考える。一方、多くの文章や文学作品などに触れさせる指導の中で、思考力を伸ばし、心情を豊かにしてきた。また読書に親しむ態度を涵養し、表現能力の向上も図ったりするなど、様々な指導方法の工夫がなされてきているところである。

今回の授業実践においては、国語Ⅰの現代詩の学習を通して自己コントロール力及び自己肯定感の育成について研究することとした。

教材の現代詩について、まず詩を読み味わい、感想をグループの中で述べ合うことで交流し、同時に自己を振り返り見つめる（自己省察）。また自己の在り方生き方を考える中で、自己肯定感を実感する。さらに感想を書いたり「生きる」ということを粘り強く考え記述する中で自己コントロール力を育成することを企図した。

その実践に当たっては、次の二つの視点をもって行うことにした。

①　教科独自の指導方法を生かす視点

自己コントロール力の育成と自己肯定感を確かなものにすることとは、国語科の授業改善と大きなかかわりがあると考えられる。そこで、授業改善のポイントともなる主体的な言語活動の設定、言語意識の明確化・具体化、交流の場の設定など魅力ある授業づくりの視点から次のようにまとめた。

（主体的な言語活動の設定）

○単元の学習内容に対して、なぜ学ぶのか、どう学ぶのか、学んだことをどう生かすのかを生徒一人一人が明確化できるような学習計画を作ることによって、主体的な学びの姿勢をもつようにする。

○単元の目標や内容に即した適切な言語活動(ここでは、グループ学習における意見交流)を設定することによって、主体的に取り組み、意見交流を成功させるための自己コントロール力を働かせ、自己肯定感を実感できるようにする。

○単元全体を通して「自己の生とは何か、生きるとはどういうことか」という課題解決的な学習を設定することで、主体的な言語学習の仕方を身に付けるようにする。

（言語意識の明確化・具体化）

○言語意識として「目的意識」「相手意識」「方法意識」「場面状況意識」「評価意識」を明確化することによって、学習への意欲が高まり、自己肯定感が促されたり、自己を振り返る活動を通して自己コントロールとしての機能も発揮される。

目的意識	単元の学習内容に対して、なぜ学ぶのか、学んだことをどう生かすのか生徒一人一人が明確化すること。
相手意識	自分の考えや学んだことを誰に対して発信するのか、あるいは相手の立場に立つという意識をもつこと。
方法意識	単元に応じて、学ぶ方法の基本を学習することによって、生徒が自分なりに学習方法を選択したり、工夫したりすること。
場面状況意識	どういう場面や状況の中で言語活動を展開するのかという意識を明確にすること。
評価意識	学習の過程や学習のまとめの際に、言語能力がどれだけ高まったかを適切に把握すること。

（交流の場の設定）

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の全てにかかわって学びの交流は重要なことである。互いに学び合い、互いに刺激を受け合い、認め合う中で、それぞれの言語能力が鍛えられていく。また、一人では身に付けることができない人と人とのふれ合いの中で生まれる伝え合う力が育っていく。互いに認め合う中で自己肯定感が育ち、互いに学び合う中で、自分の学びを調整したり修正したりする自己コントロール力が高まるようになる。

② 自己指導能力をはぐくむ視点

自己コントロール力や自己肯定感をはぐくむために、国語科として考える主体的な学習の条件を次のように考える。

ア 生徒に自己存在感を実感させること
－役割達成感をもたせる－

・学習過程においてダイナミックな言語活動を設定し、学習に対する充実感をもたせる。

・生徒一人一人が静かに自己を見つめることができる学習環境を整える。

・グループ学習で協力し合い、特定の生徒だけでなく全員の力が発揮できるようにする。
・自分の目標に対する達成感、学習に対する充実感をもたせる。
イ　共感的人間関係をはぐくむこと
－仲間や教師の肯定的態度・共感的理解－
・自分の思いや考えを安心して表現できる、互いに心が開かれた教室・グループを作る。
・生徒の意見や考えを教師が認め励ます姿勢をとる。
・生徒同士が互いの思いや考えを認め合える交流の時間がある。
ウ　自己決定の場をできるだけ多く設けること
－自己への振り返りを促す－
・課題を設定することにより、自分の考えをもつように企図し、グループ学習によって主体的な言語活動の展開を図り、充実感や肯定感をもたせる。
・生徒一人一人が自分の意見や考えを表明できる場を設定する。
・主体的に取り組んだ学習を振り返り静かに考える時間を設定する。

(2)単元名と単元設定の理由

ア　単元名　　国語Ⅰ「詩」

イ　単元設定の理由

扱った教材は、現代詩『樹下の二人』（高村光太郎　作）『I was born』（吉野弘　作）（教科書は「高等学校国語一」第一学習社）である。

『樹下の二人』『I was born』は、ともに詩としての完成度が極めて高く、豊かな詩想を有している。人を愛するということ、生きるということを自然な形で内に湛えており、精巧な技巧を駆使してそれらが発露されている。「詩」という文芸作品を学ぶに適した作品である。また、大人に近付く一歩を踏み出そうとしている高校１年生にとっては、「愛」や「生」を考えるのにふさわしい教材であるとも考えた。

『樹下の二人』は、光太郎と智恵子の二人の愛と生命を讃歌した作品であり、人を愛することの尊さ、すばらしさに気付くことをねらいの一つとした。

『I was born』は、題名のとおり、生まれてくることは受身形であるが、生かされていることや生き死にの悲しみに気付く作品である。子孫を残すために卵をお腹一杯に充満させた蜉蝣の話から、「母の胸までふさぐ僕の白い肉体」を想像する。生を受けたことへの感謝と、生命が必然的にもつ生き死にの悲しみを意識させることをねらいの一つとした。

生徒が詩を鑑賞し学習する中で、自己の生を省み、自らの在り方生き方を考察し、その中で抱いた自分の思いを言葉で表現して他者に伝える。他者の思いを聞いて自らを省みる。その過程において自己の生を大切にする心を培い、自己コントロール力をはぐくみ自己肯定感を実感できることを単元設定する際に考えた。

自己の「生」を省みる際は、これまでの自分がたどってきた道を静かにていねいに振り返らせるように留意した。幼少期から児童期、思春期とおのおのの時期の自分を振り返ることは、青年中期の入り口にいる高校１年生にとって、今後の生き方を真剣に考えることにつながり意義あることだと考えた。

現代詩の指導内容・事項を踏まえた上で、自己を振り返り自己を洞察するために教科書所収以外にも「生」に関連する詩を紹介した。多様な個性をもつ生徒一人一人が自分自身の感

性に最も適う詩を見つけることができるようにしたのである。

本単元においては、自己の存在や他者との関係性をテーマにした詩を読み味わうことを通して、生徒が自らの在り方生き方について深く考察し、詩を鑑賞した後、「自分の大切な人へ」の思いを創作詩という形で表現することにより、言葉による表現の豊かな可能性に気付くようにすることをねらいとした。

また、様々な詩の読み取りについて、自分の考えをまとめ発表することや、他者の考えを聞くというグループでの話し合いを通して、他者の意見を尊重しながら自己の在り方生き方について主体的に考えるようにしたいと考えた。

自らの「生」(在り方生き方)について考える。「この世に生を受けたことのありがたさ」「今生きていることのありがたさ」に気付き、自己肯定感を実感できるようにする。詩に対する感想や意見をもち、それを記述し、その後他者に口頭で表明する。また「大切な人への気持ち」を詩という形態を用いて表現するという学習過程において、自己コントロール力をはぐくみ、自己肯定感を実感する授業が展開できると考えた。

(3)単元目標

ア　様々な詩を読み味わうことで、人間の在り方生き方について考える。
（関心・意欲・態度）
イ　様々な詩を鑑賞し、感想を記す。（表現の能力）
ウ　グループの中において互いに詩に対して考えたことや感じたことを、その理由や根拠を明らかにしながら話す。（表現の能力）
エ　「大切な人への気持ち」を詩という形態を用いて表現する。（表現の能力）
オ　様々な詩を鑑賞し、詩人の心情、詩の主題などを読み取る。（理解の能力）
カ　グループの中において他の成員が詩に対して考えたことや感じたことを、正確に聴き取り自分の感想や思いと比較する。（理解の能力）
キ　詩特有の表現法(比喩法、構成、言いまわし、表現の巧みさ)を理解する。
（知識・理解）

(4)単元の指導計画（p.112.113参照）

(5)指導上の工夫

教科書所収の詩、高村光太郎の『樹下の二人』と吉野弘の『I was born』を鑑賞することで、「大切な人への愛情」「生きることの意味」について考えた。その後で、114ページにあげる詩を紹介し、「生（生まれること）の意味」を自己肯定感・自己存在感を取り上げた視点とし、「他者とともに生きていることの意味」を共感的人間関係・愛情・他者肯定の視点とした。「生きることの意味」を、生きる勇気や生きる力に関連付けて見立てたり、「主体的な在り方生き方の確立」について、段階的に考えることができるように工夫した。

具体的には、自分の思いや意見を明確にしていき、順序立てて考えていけるようにプリントを用意した。プリントには、まず『樹下の二人』『I was born』という詩を読んでどのようなことを感じたのかを記述した。また教科書以外の詩をどのように受け止めたのかを確認し、その後、それらの詩を参考にしながら自分の大切な人に対する思いを生徒自身の言葉で表現するようにした。

「自己肯定感・自己コントロール力をはぐくむ『詩』の授業」

単元名 国語Ⅰ「詩」　　－「詩」を読み、自らの「在り方」「生き方」について考えよう－

自己コントロール力をはぐくむ視点を★、自己肯定感をはぐくむ視点を○で表記

時	指導過程 指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価	★自己コントロール力をはぐくむ視点 ○自己肯定感をはぐくむ視点
2	**基本学習** **課題把握** 「樹下の二人」の内容理解	・「詩」の単元目標－詩を読み味わうとともに言語感覚を鋭敏にし感性を豊かにして、詩に親しむ態度を養う－を確認する。	・**「詩」とは何かという視点**を明確にし、学習についての見通しと目標がもてるようにする。		
		「樹下の二人」高村光太郎 この詩の形態(詩型・韻律)、描かれている人物や場所、時代など、詩の背景を把握し、主題を明確にして理解する。	・**どう読むのかという視点**を明確にしながら、「近代詩」の鑑賞を深めることができるように留意する。 ・リフレーンや語りかけの効果を理解させる。 ・この詩の情景を豊かに想像させ、作者の心情理解に役立たせる。 ・この詩に描かれた「愛」の在り方を理解させる。	・詩特有の構成、言いまわしに気付きそこに込められた作者の思いや意図が理解できる。 (知)(理解)	★じっくり読み、味わう姿勢をもつ。 ○基本学習の内容を習得し、分かる実感を味わう。
2	「I was born」の内容理解	**「I was born」吉野弘** この詩の形態(詩型・韻律)、描かれている人物や生き物のイメージを把握し、主題を明確にして理解する。	・「散文詩」に親しませ、「現代詩」の鑑賞を深めることができるように留意する。 ・この詩に描かれた「生命の不思議さ・貴さ」について考え、自らの「生」についても思いが至るように留意する。	・詩特有の構成、言いまわしに気付きそこに込められた作者の思いや意図が理解できる。 (知)(理解)	★じっくり読み、味わう姿勢をもつ。 ○基本学習の内容を習得し、分かる実感を味わう。
1	**課題設定** 自己の「生」についての考察	・二つの詩の主題について、考える。「生命の不思議さ・貴さ」について疑問・意見を交流し、自分の立場を明確にして、自分のテーマをつくる。 例「生まれることの意味」 「今生きていることの意味」 「生かされていること」 「父や母に対する思い」	・詩を**読み味わったことをどう生かすか、**という視点のもとに、自らの「生」について考えさせる。 ・まとめる際には、「I was born」の詩の内容に縛られず、自分独自の考え・思いが述べられるように留意する。	・作者の思いや考えに対して自分の考えを明確にもつ。　(表現)	○様々な疑問や意見をもつことを肯定する。 ○自己の存在を受け入れることの重要性に気付く。 ○テーマを自己決定する。

※（関）関心・意欲・態度　　（表現）表現の能力　　（理解）理解の能力　　（知）知識・理解

時	指導過程 指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価	★自己コントロール力をはぐくむ視点 ○自己肯定感をはぐくむ視点
2	**応用学習** **課題追究** 「生」に関する班別学習 ―「生」をテーマとする詩を読み述べ合う―	・自らの「生」について考える。形態は班別学習。 ①テーマ(「生」)に関連する作品の朗読を聞く。 ②朗読で聞いた詩について、各班において、主な感想や意見をまとめる。	・あらかじめテーマ(「生」)に関連する作品をプリントにして配付する。 ・班別討議の流れを全体の場で確認する。 ・班別討議を通して他者への理解を深めることができるように留意する。	・様々な詩を読み味わうことで、人間の在り方生き方について考える。(関) ・班の中で協力して課題学習を進めようとする。(関) ・テーマに即した詩を選ぶことができる。(理解) ・班内の感想や意見を適切にまとめることができる。(表現)	○自らの「生」を振り返り見つめることで、自尊感情を高める。 ★ねばり強くテーマを追究しようとする姿勢をもつ。 ★各班で話し合う際、お互いの意見を尊重しようとする。 ○テーマを自力解決する充実感を味わう。
		・各班の感想・意見を発表する。 ・班別発表を振り返る。	・感想や意見を聞き取る際のポイントを示す。	・テーマに基づき、自分たちの考えを説得力のあるものとして発表できる。(表現)	★発表を真剣に聞き取る態度をとる。
3	**発信学習** **発展・深化** 大切な人に対してけびかける「詩」の創作	・「詩」の読解を基に、人に世話になったことを考えた上で自分の「生」について考え、今の「自分の在り方」について見つめ直す。 ・様々な詩を読むことを通して人としての有り様を考察し、自らも大切な人に対して呼びかける「詩」を創作する。	・自分の在り方について、客観的に把握するため、「内観法」の手法を紹介する。 ＊「内観法」‥‥ 母や父など他人にしてもらったこと、あるいはしたことなど年代を追って書いてみる。 ・創作した詩を鑑賞する際、互いの気持ちを尊重し、自他の弱さや劣等感なども受け入れた上で、自他の存在のありがたさに気付くように促す。	・自らの「生」について向き合い、自分の「生」を主体的に把握し、創作してから発表する。(知)(表現)	○互いの生き方を尊重することによって、自分の生き方に関する思いを自信をもって発表する。

紹介した詩とその作者及びこの詩を取り上げた視点は次のとおりである。

	［詩の題名］	［作者名］	（取り上げた視点）
①	母をおもう	高村　光太郎	（母への思い　母への感謝　内観）
②	わたしと小鳥とすずと	金子　みすゞ	（自己肯定　他者肯定　共感的人間関係）
③	大漁（たいりょう）	金子　みすゞ	（弱者への視点　他者肯定　共感的人間関係）
④	あいたくて	工藤　直子	（自己の存在　愛情）
⑤	生きる	谷川　俊太郎	（自己の存在 生きる勇気 生きることの意味）

などの詩

「私の大切な人へ」というテーマで、各自詩を創作させる際、内観法を用いることで、より深く「他者と自己との関係」、「自己の在り方生き方」について考えることができるように工夫した。他者に「お世話になったこと」「して返したこと」「迷惑をかけたこと」について、深く考えることで、他者によって生かされていること（他者への感謝の念）を再認識させ、自己の存在の意義に気付くことができるのではないかと考えたのである。

「私の大切な人へ」　詩の創作指導－内観法を用いて－

授業で扱った様々な詩を参考にしながら、自分の大切な人に対する思いを自分自身の言葉で表現する。

内観法を用いた手順

① 深呼吸をして気持ちを落ち着かせ、いままでの人生を振り返る。
その人生の中で、自分のことを見守ってくれていた人、支えてくれていた人、大切な人をゆっくりと思い浮かべる。その後、誰を思い浮かべたかを書く。

② ①で、思い浮かべた人に、「世話をしてもらったこと」はどのようなことか、幼いころのことから、ゆっくりと思い出す。

③ ①で思い浮かべた人に対して、自分が「して返したこと」 はどのようなことか考える。

④ ①で思い浮かべた人に対して、「迷惑をかけたことはないか」、考える。

☆内観（１～４）で思い出したことを参考にして、「○○へ」「○○をおもう」などの題で、「詩」を一編、創作する。

詩の創作を終え、生徒各自が作った詩を作者名は伏せてプリントにして紹介した。それらの詩を三つの部門（「家族への詩」「友人への詩」「好きな人への詩」）に分け、各自好きな詩を選び、その理由や感想をグループの中で述べ合い、討議を深めた。討議しながらグループごとに各部門において好きな詩を一つずつ選ばせた。グループごとでの話し合いの後、「グループ討議を終えて（まとめ・感想）」を書くことによって、今日の授業（二時間連続）と今回の現代詩の単元全体に関する生徒自身のまとめを行った。

国語Ⅰ　詩の授業「私の大切な人へ」　－生徒への配付プリントより－

グループ討議を終えて（まとめ・感想）

1　今日の授業を振り返って、自分の気持ちに一番近いところの番号に○をつけてください。
（1 そう思わない　2 あまりそう思わない　3 そう思う　4 大変そう思う）

a　協力できたか。（1　2　3　4 ）
b　参加したという実感はあったか。（1　2　3　4 ）
c　意欲的に取り組めたか。（1　2　3　4 ）
d　やりがいがあったか。（1　2　3　4 ）
e　おもしろかったか。（1　2　3　4 ）

2　グループの中の話し合いについて、主な意見、特に印象に残ったことなどを、簡単にまとめてください。
3　今日の授業に関する感想（よかったこと、悪かったこと、感じたことなど）を書いてください。

＊「詩」の授業全体を振り返って、次の質問に答えてください。
4　特に印象に残っている詩は何ですか。
5　よかったことは、何ですか。
6　改善点は何ですか。
7　考えたこと、感じたこと、身に付いたことはどのようなことですか。様々な詩の紹介、詩の創作など、「詩」の授業全体を振り返りながら書いてください。
8　自分自身の在り方生き方、感じ方、考え方などで変化したと（変化しそうなこと）はありますか。あれば、できるだけ具体的に書いてください。
9　その他、意見・感想などがあれば、書いてください。

（生徒の主な意見・感想）

○　2についての意見・感想
・みんな結構考えていることが同じで、16才の今は人生の本当の途中なんだなって思った。これから死ぬまでに精一杯生きて自分がはっきり好きって言えるようになりたいと思った。
○　3についての意見・感想
・「生きるということ」を真剣に話し合って、将来自分が何のため、どのようなことをして、どう生きていくのか考えることができた。
・少人数なので恥ずかしくなく自分の意見がしっかり言えた。
・グループ討議することで、世界が広がると改めて実感した。人の意見をいろいろ聞くことができてとても感動した。参考になった。
・広い目でみんな物事を考えていると思った。人の意見を聞くと言うことは、自分の世界を少し大きくする手段としてはすごく良いことだと思った。
・自分で考えていること以外に、他の人の意見を知ることができて良かった。いつも一人で勉強しているという感じだが、グループでやると協力もできてよかった。楽しかったので、またこのような授業がしたい。
・このような授業形態はよいと思うが、グループによっては話があまり進まないと思った。しっかりした人に進行役になってもらい、話し合う目的をしっかり見据えて話し合うべきだった。
○　7についての意見・感想
・「生きている」ということの意味についていろいろ考えさせられた。これからの人生をいいものにしていきたい。
・この授業を通して、「親孝行」をしたいと思うようになった。また、それぞれの「違い」を認めあうことの大切さを学んだ。
○　9についての意見・感想
・今日のような授業はたまには良いが、自分には向いていない。少し疲れた。

(6)生徒の様子・変容

ア　単元の授業に入る前

現代詩の学習に入るまでは、基本的には学級一斉の学習形態で行ってきた。学級としては概ね落ち着いて授業に臨む生徒が多い。積極的に発言する生徒もいるが、自分の思いや意見、感想などを述べることに抵抗を感じる生徒が多い。そこで、今回はなんとか自分の思いや感想を他者に伝えることができるように、グループ学習の形態を取り入れた。

イ　単元の授業を終えて

『樹下の二人』、『I was born』の二編の詩について、生徒は高い関心をもち、意欲的に鑑賞することができた。すぐれた作品そのものが内包している力と、生徒の精神面における発達段階がうまく一致したからだと考えられる。

生徒は、『樹下の二人』の学習を通して、愛を純粋に讃歌する光太郎を肯定的に受け止め、人と人との絆を深める愛についての認識を深めることができた。人を慈しみ、愛情を抱くことの大切さを再認識することによって、自己の存在を尊く価値あるものとしてとらえることができ、自己肯定感を実感することができた。

『I was born』では、生命誕生のもつ神秘さ、神々しさに改めて気付き、この世に生を受けたことに感謝することができた。詩に表現されている「生かされている」ということを意識することにより、自己を客観的に振り返ることができた。自己の生を見つめ直し、在り方生き方を考察することを通して、自己コントロール力をはぐくむことができたと考える。

グループ討議においては、各自が積極的に感想や意見を述べ合うことができた。ふだんの一斉授業時に指名し発表させようとしても、あまり積極的に発言しない生徒が多い。しかし今回のように、少人数の集団内で発言させると、ほとんどの生徒が積極的に自分の意見を発言した。ただし、なかにはおとなしく消極的な雰囲気のグループも生じ、そのようなグループにいた生徒の感想のなかには、グループ討議の形態をとった今回の授業に対して否定的なものがあった。

「詩」の創作については、内観法などを参考に、いくつかの段階を経て取り組ませたので、ほとんどの生徒が積極的に取り組めた。大切な人への詩の創作を通して「自分がお世話になっている親や友人」に対する感謝の念や、「自分の存在」を肯定する気持ちを再認識できた生徒が多かった。また、日ごろ学級の中で落ち着きがない生徒も、詩の鑑賞やグループ討議、内観法を応用した詩の創作などにおいて、積極的にかかわることができた。

(7)成果と課題

今回は、現代詩の学習における基礎的・基本的な内容を押さえた上で、生徒に自分自身を振り返らせ、自己の在り方生き方について思索させた。現代詩の鑑賞を通して、表現面や内容面の理解をさせ、生徒自身の感想を述べさせるような従来の詩の学習形態とは若干異なる指導方法を取り入れたのである。また、詩の感想を記した上でグループの中において感想や意見を交流することを通して、様々なものの見方・考え方があることに気付くようにした。これらの学習活動を通して、自己コントロール力をはぐくみ自己肯定感を実感することができるように企図したのである。

○　グループ学習は、国語Ⅰの授業においては初めての試みであったが、生徒はそれほど違和感を抱くことなく学習に取り組んだ。学級全体の中でだと感想や意見を述べることに積極的な生徒は多くないが、グループの中においては比較的自然に意見や感想を表明することができたようである。

○　内観法を用いて自己を振り返らせることによって、今の自分が在ることについての他者の存在を正面からとらえて考えることができ、自己肯定感を実感するのに効果があった。これまでの人生の中で世話になった人に対する詩の創作は、創作過程で自己の生を見つめ直すよい機会となり、全員が生まれてから今に至るまでを真剣に思い起こし、考え、真摯に詩の創作に取り組んだ。それだけに詩を完成させた時の喜びは大きく、確かな達成感をもつことができた。自己を振り返る、詩を生み出すという沈思黙考の中で、ある程度の自己コントロール力もはぐくめたのではないかと考える。

○　グループにおける感想や意見の交流では、他者の感想や意見を聞くことによって、視野を広げ新たな視点をもつことができ、詩を深く読み込むことに役立った。グループの中で互いの感性をぶつけ合うことでよい刺激となり、鑑賞に厚みが増したのではないかと考える。ただし、教師は、生徒の思い込みや主観に陥った鑑賞をしていないかということについて、各グループの中を適宜机間指導して確認する必要がある。

このようなグループ学習を通して、生徒一人一人が授業に参加したという意識をもつことができ、自己コントロール力をある程度はぐくみ自己肯定感を実感することができたのは成果であった。

高等学校の国語科のすべての教材においてグループ学習を取り入れることは、その単元での目標や内容によって難しいと考えるが、適宜少人数による話し合いの場を設け、自己を見つめ、互いに切磋琢磨をする中で学習意欲を高める指導方法も大切ではないかと考える。またグループ学習を行う中で、新学習指導要領に示されている「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の学習を行い、少しでも言語能力が身に付いたという成就感・達成感を実感させ、粘り強い学習習慣を身に付けさせることが大切であると考える。

今回のグループ学習において生徒が実感した自己肯定感を持続させることができるか、またグループ討議や詩の感想を書いたり詩の創作をしたりする過程ではぐくんだ自己コントロール力を次の学習場面において生かしていけるかが今後の課題である。今回のような学習方法・形態を通して高等学校国語科における授業改善を図っていくことは意味あることだと考える。